祇園祭

鷹山の歩み

洛中洛外図屏風［上杉本］

鶏鉾と白楽天山

手前が鶏鉾。車の屋根と鉾との中間部分になにやらワニのようなものが掛けられているが、これも風流の一つ。また囃子台のなかに唐輪髷の人物が見える。唐輪髷は女性の髪型。はたしてこの人物は女性か。

祇園祭

廣山

廣田　長三郎

一、はじめに

「お祭」は、崇敬する尊い御神霊をお移しした「御神与の渡御」を主体に、それをお護りし、お供をする人達の奉仕によって行われます。

「祇園祭」は本来「祇園御霊会」と称し、また単に「御霊会」・「祇園会」ともいいます。貞観十一年（八六九年）、各地に疫病が蔓延した時、日本六十六ヶ国に因んで、長さ二丈ばかりの「矛」六十六本を「神泉苑」に立て、その退散を祈ったのが始めといわれています。

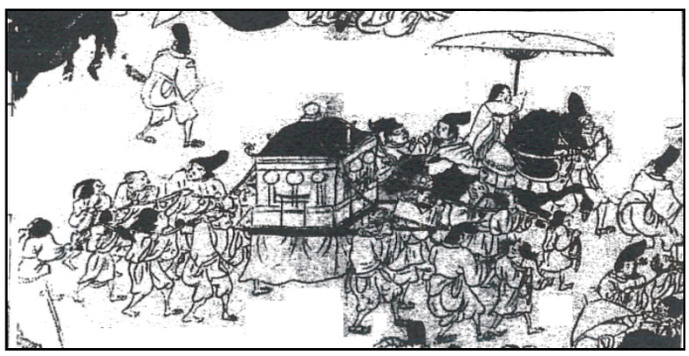
爾来、断続はありますが、よく今日まで千年も続いています。

山鉾の巡行は、当初、御神与の渡御がすんだ後、行われましたが、今は真夏の炎天下、盛大に行われます。しかも最も大切な本命の御神与の渡御と、その隷属的立場の山鉾の巡行が同じ日でありながら一緒ではなく、その地域や時間も別々に行われ、全く関係のない二つのお祭が存在するような錯覚を起こさせます。

御神与の渡御がないのにお供の山鉾巡行が逆に賑々しく行われるなど、全く屈託なく至っておおらかなものでした。

二、山鉾の成り立ち

「御霊会」は、年々盛んとなり、鎌倉時代末には「犬神人（いぬじにん）」によって神前を清め、「三基の御神与」〔中御座―素戔嗚尊（すさのおのみこと）（牛頭天王（ごずてんのう））東御座―櫛稲田姫・西御座―八柱御子神（やはしらのみこがみ）〕を　先導して供奉、鉾を担ぎ田楽を鳴らし、それに「作山風流（つくりやまふりゅう）」（大嘗祭の標山（しめやま）を真似た前で演じる説立烏帽子で笛や太鼓に合わせて話寸劇）を始め「散楽空車（さんがくむなぐるま）」（猿楽を演じる屋根のない車）　や



「年中行事絵巻」神輿と巫女の図（中央公論新社『日本の絵巻』より）

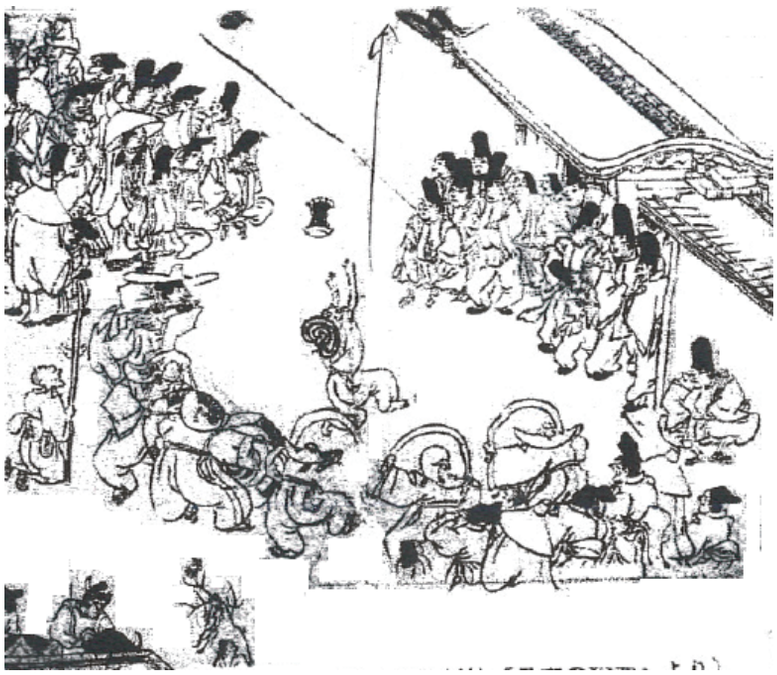
「久世（曲）舞車」（白拍子が水干立烏帽子で笛太鼓に合わせて歌ったり舞ったりする車）、更に巫女・神楽・獅子舞・武者列・鷺舞・馬長などが加わり益々賑々しくお供をしました。

次いで、山崎の離宮八幡の「油座」より「定鉾」が、また、西陣の機業の元締「大舎人座」より「鵲（笠鷺）鉾」が参加します。

その頃の鉾は「剣鉾」で、現在、上御霊・岡崎・粟田神社　にある鉾と同様のものと思われます。

これらが次第に大形化し、色々の飾りが付加結合し、その上当時の人の趣向に合ったものも考えられ、遂にお互いが自慢し合うまでに拡大発展しました。

年中行事絵巻」鉾の図（中央公論新社『日本の絵巻』より）



「年中行事絵巻」田楽の図（中央公論新社『日本の絵巻』より）

おそらく南北朝時代の少し前には、今日のような形態の山鉾が出来あがっていたのではないかと思います。当時、一般庶民は至って貧しく、氏神様に対する信仰が薄く、そのうえ社会の治安も不安で生活に対する環境は、誠に厳しいものでした。

従って、経済的に余裕のある職種別組織の「座」や「土倉」、それに酒や油を扱う業者がお祭りを支え支援・維持してきました。

しかし、中世以降は戦乱の中、自衛せねばならない町人たちは必然的に結束を固め　地域の自治共同体の「町組（ちょうぐみ）」を組織し、

「年中行事絵巻」獅子の図（中央公論新社『日本の絵巻』より）

お祭も皆の氏神様のお祭として自発的にお世話するようになります。従来の形式を重んじるお上的性格より、おおらかな庶民的形態へと変化します。お祭は、氏神様に対する感謝と、更なる祈念の心で行われます。それに参加する者も見物する者も娯楽のない当時、唯一の楽しみでした。

註

●犬神人（いぬじにん）　別名〝つるめそ〟といいます。中世祇園社に属し、元来神事用の弓弦を作っていましたが、後雑務も行い、その見返りに商業上の特権が与えられました。

●馬長（うまおさ）　かつて殿上人が天皇の命により、御霊会に花を添えるため自分の小舎人童を美しく着飾って馬に乗せ供奉したもの。

●南北朝時代　延元元年（一三三六年）、足利尊氏が光明天皇を擁し、北朝が始まります。元中九年（明徳三年・一三九二年）、南北朝合一後、長禄元年（一四五七年）、長禄之変で後南朝絶滅。

三、中世祇園御霊会点景

六月七日、祇園社を出発した三基の御神与は、四条大路を西へ、堀川木材神人の奉仕で架けられた鴨川の浮き橋を渡り洛中に入ります。四条高倉で「綿座」より神供米を過分に頂戴し、中御座と西御座の御神与は、烏丸小路を南下、高辻小路を東へ、「大政所御旅所」に着きます。

一方、東御座の御神与は、四条大路より東洞院大路を北上し、冷泉小路（現夷川）を東へ、「少将井御旅所」に着きます。一週間、鎮座の後、十四日、中御座と西御座の御神与は五条通（現松原通）を西へ、東御座の御神与は二条大路を西へ、各々大宮大路を経て三条大宮の「神泉苑」南端の渚に着きます。三座が集結し、簡単な神事の後、三条大路を東へ、京極より四条大路に出て東へ、祇園社に帰座されます。

治承三年（一一七九年）の条に、「六月十四日御霊会に後白河院は三条室町で、又関白藤原基房は三条東洞院の桟敷で、御神与をお迎えした」と記されています。当時に神幸祭よりも還幸祭の方が賑やかだったようです。

また、永和二年（一三七六年）の条に、「この年も御神与の渡御がないのに将軍足利義満が桟敷で山鉾の巡行を見物した」ことや、「高大鉾が突風で倒れ、老尼がその下敷となり圧死した」ことが記されています。同四年の条に、「この年も御神与の渡御がなく義満は寵愛する〝世阿弥〟を伴い山鉾の巡行を見物しながら同じ器からお料理を取って食べたことは〝天下の将軍らしくない〟と、公卿より〝ひんしゅく〟をかった」話が出ています。康暦二年（一三八〇年）も政情不安にかかわらず、義満は巡行を見物しています。この年も御神与の渡御がなく山鉾の巡行のみが行われました。義満は、よほど興味を持っていたようです。

「神事無之共山鉾渡度（しんじこれなくともやまほこわたしたし）」といわれるほど、御神与の渡御がないと、かえって町衆の山鉾にかける情熱が湧き立ち、ますます自立し創意工夫の上すばらしい姿へと発展します。

室町時代に「くじ罪人」という狂言があります。町内の連中が頭役（町内の世話役・年寄）の家に集まり、その年の山の出し物を相談します。この年は地獄の閻魔が罪人を追い立てるのですが、肝心の罪人のなり手がなく、仕方なく「くじ」を引いたところ頭役が当たりました。

ただの召し使いに過ぎない太郎冠者が罪人を追い廻し日頃のうっ憤を晴らす〟という筋書です。出し物は今日のように固定せず、毎年皆と相談しとて決めます。大変な苦労ですが、それでもアーでもないコーでもないと喧々諤々、結構楽しいことです。この狂言で毎年町衆が山の出し物を決める様子がよく判ります。

註

●御旅所＝本来、神様が天より降臨される清浄の処として神職が二、三名常住していました。「旅」は旅行の〝旅〟ではなく〝賜(たま)び〟で、〝賜(たまわ)る〟〝戴く〟の意味です。即ちここで御神徳を戴き、榊にお移り願い神様を白馬に乗せて集落へお連れします。かねてより準備したお祭りの場で、常日頃の感謝の心で賑やかにお慰めして帰りもお送りします。これを「神幸祭」「還幸祭」といいます。後、集落に神様のお住いが出来てからはそれが曖昧となっているのが今日の姿です。葵祭の前に行われる「御蔭祭」は、神様をお迎えしお祀りする本来の姿を今に伝える貴重なお祭です。

●八坂神社御旅所＝現在四条通京極の南側にあります。ちょうど洛中洛外の境に当たります。天正十九年（一五九一年）、秀吉の都の改造計画で従来の大政所・少将井御旅所を廃し新設したものです。

四、鷹山の姿

「鷹山」は別名〝鷹つかひ山〟・〝鷹匠山〟・〝太郎山〟・〝行（業）平山〟ともいいます。

「祇園社記　応仁之乱前分」に、〝鷹つかひ山　三条室町西洞院間〟と記され、応仁文明之乱（一四六七～七七年）以前から「衣棚町」・「釜座町」の珍しく二ヶ町より出た古い山です。

鷹を手に持つ「鷹匠」に犬を引いている「犬飼」、それに樽を背負い面白おかしく粽を食べるカラクリの「従者」の三体の人形、更に真松の根こ山籠に「雉子（きじ）」がうずくまっています。

特に従者が粽を食べるカラクリが珍しく、前祭の「かまきり山」と共に、大変人気がありました。

「鷹匠」「樽負」「犬飼」の御神体。（三条通室町西入ル衣棚町）

五、乱（応仁の乱）後　復興初巡行

応仁の乱で、都は一面焼け野原と化し、鷹山も他の山鉾同様、致命的打撃を受けました。当時、庶民は貧しく、各自の家の修復や仕事の再起に精一杯で、とても氏神様の神事のお手伝いまで手がまわらず復興初巡行まで実に二十数年かかりました。

明応九年（一五〇〇年）、待ちに待った乱後復興初めての巡行です。乱以前の六十四基とは比較になりませんが、それでも前祭に「ほこ」（長刀鉾）を始め二十五基が、後祭には「うしわか殿」（橋弁慶山）など十基が再建し、雄々しく巡行に参加しました。鷹山も天晴れ復活し、しかも後祭の殿（しんがり）を飾る大役をおおせつかりました。

六、「鷹山之図」初お目見得

その後どうしたことか鷹山は約百三十年程文献や絵画に出て来ません。あの有名な「洛中洛外図屏風」〔町田本は文永年間（一五二一～二七年）の都の景観をあらわしたもので作者不詳。上杉本は天文年間（一五三二～五四年）の後半より永禄年間（一五五八～六九年）前半の都を描いたもので、その作者は狩野永徳と云われています」にも姿をあらわさず、やっと江戸初期の寛永年間（一六二四～四三年）中頃の作と云われる「祇園祭礼図屏風」図①（六曲一双、作者不詳京博蔵）に〝鷹山〟が描かれています。台車の上に三体の人形、眞松山籠があり、そこに稚児が居

図①

※図①の拡大詳細図

り、囃子方が乗っている青天井の曳き山として描かれています。これが初めて見る「鷹山の姿」です。おそらく乱後復興初巡行のときの姿がそのまま続いているようです。

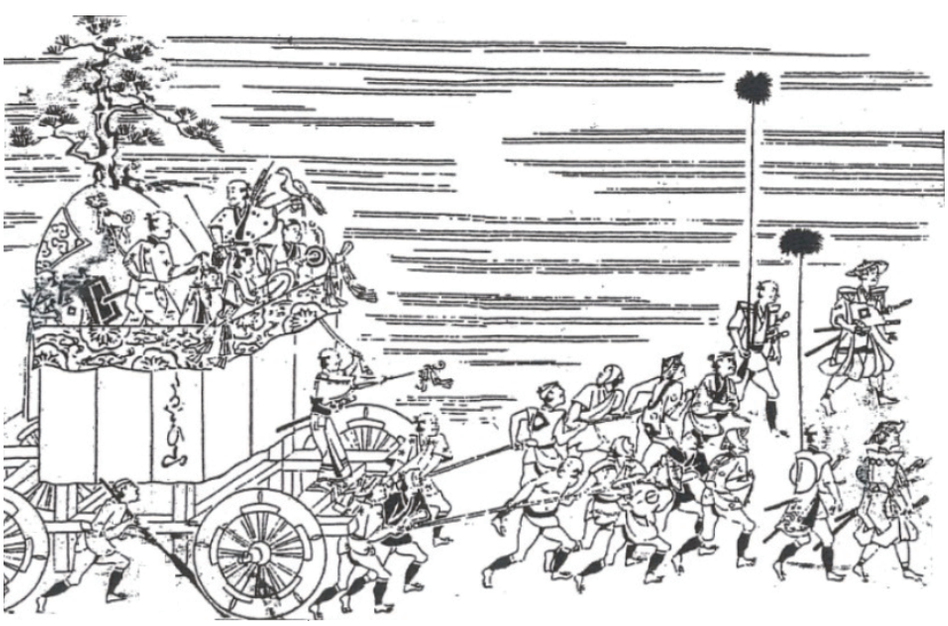
正保三年（一六四六年）の「祇園祭礼図絵巻下巻」（永青文庫蔵）や明歴年間（一六五五～五七年）作の「祇園祭礼図屏風」〔六曲一隻、海北友雪（一五九八～一六七七）作、八幡山保存会蔵〕にも囃子方の乗っている青天井の曳き山として鷹山が出ています。

さて「鷹山」はいつ登場したのか？

その形態は？

乱後復興、初巡行の時の姿は？

舁(か)き山か曳(ひ)き山か、全く判りません。しかし、想像をたくましくするなれば、〝カラクリ人形の山〟として、舁き山で登場し皆を喜ばせ、乱後復興の時、青天井の曳き山に変わったのではないかと思います。舁き山の特徴である真松・山籠が残存していることや乱後初巡行に際し、後祭の最後尾に位置し締めくくる大役をおおせつかっているからです。いずれにしても、このような形態の曳き山として約二百年、元気に巡行に参加し、庶民を喜ばせてくれました。



七、宝永の大火で罹災

宝永五年（一七〇八年）、京の中心地で「大火災」が起こりました。罹災区域は、鴨川～堀川・四条～今出川です。

鷹山も壊滅的被害を蒙りましたが、町衆の氏神様に対する篤い信仰心と向上しつつある経済力に支えられ立ち直りました。

その経緯は判りませんが、三十数年後の寛保二年（一七四二年）の「衣棚町文書」によりますと、

〝鷹山上水引人形水干狩衣新調　衣棚北町　軒役ごとに一両一分拠出〟とあります。上水引は、またの名を「天水引」ともいい、古い屋根の軒下に付ける懸装品です。

これを新調したということは、既に屋根があり上水引が付いていたということです。大火で罹災後再建の時、簡素な破風のある屋根が作られたと考えてはどうでしょう。

その実体を知り得る資料として十五年後の宝暦七年（一七五七年）の「祇園御霊会細記　山鉾巡行図」に鷹山図③が描かれています。

それを見ますと、舁き山の名残である真松・山籠が残存し、簡単な破風のある屋根に「上水引」が付けられ、四枚綴り胴懸、それを二番・三番の「下水引」が飾られている曳き山です。

同じ巻に「観音山之図新町蛸薬師下ル」と出ていますが、それは現在の「南観音山図④」のことで、屋根を見ますと、ただ単なる粗末な一枚板で、破風もなく軒下に薄い幕を吊るした曳き山です。鉾形への発展は鷹山の方が一歩進んでいたようです。鷹山は「衣棚町」・「釜座町」の二ヶ町より創建し、この二ヶ町がお世話していましたが、時の移り

図③

変りと共に、どのような事情があったのか「衣棚町」の一ヶ町が責任を持たされ、遂には江戸中期以降は「衣棚北町」（三条通の室町新町間の北側）が運営・管理・維持の責任を負いました。

せっかく協力支援の「寄り町」制度がありながら、町の町民の移動やお祭に対する意識の変化で、皆が頭を痛めている様子がよく判ります。

なお、面白いことに前祭の船鉾の車を後祭の鷹山が借用したことが記録に残っています。

共に競争しつつ、また、お互いが協力し合いお祭を盛り上げる、おおらかで楽しいものでした

図④

八、またまた天明の大火で大被害

鷹山は宝永の大火で屈することなく復活、そのうえ簡単な屋根も作られ、カラクリ人形の曳き山として巡行に参加していました。しかし、またまた八十年後、大火に見舞われます。「天明の大火」〔天明八年（一七八八年）〕です。その罹災区域は、鴨川～千本・七条～鞍馬口の範囲で、鷹山も甚大な損害を受けました。

町衆の支援により三度、不死鳥の如く甦り、早速、翌年の寛政元年の巡行にはとりあえず舁き山で、同十年（一七九八年）には元の姿に戻り曳き山として参加しました。それは、青天井の曳き山か屋根付かは不明です。

十五年後の文化九年（一八一二年）の「祇園御霊会細記　参」に、〝鷹山屋根黒塗金かなもの有　天井幕赤地錦上水引猩々緋雲に鳳凰のぬい〟と記されています。それは完全な鉾形です。やっと長年の町衆の願望が果たされたのです。

その実体を知る資料として五年後の文化十四年（一八一七年）作の「鷹山の雛形」（図⑤）（三島為吉氏蔵）が残っています。

それを見ますと全くの鉾で、山籠はなく鉾頭が真松で、南北観音山・岩戸山と同様の曳き山です。その上、主役の三体の人形や音頭取り・鷹・犬・大粽まで

図⑤

再現され巧く出来ていますが、雉子の姿がないのは不思議です。

鷹山は過去三度の過酷な試練（応仁・宝永・天明）に遭いながら屈することなく町衆の絶大な支援によって再起、その都度、前より更によいものに改変して、遂に長年の夢を達成しました。

九、休み山そして遂に消滅

鷹山の絶好調の時もそう長くは続きませんでした。僅か二十数年です。

文政九年（一八二六年）、巡行中の風雨による懸装品の汚損・本体の老朽化、それに住民のお祭に対する意識の後退などの理由で、巡行中に参加でき難くなり、遂に翌年より宵山に町会所でお飾りのみの「居祭」、いわゆる「休み山」となります。

臥薪嘗胆、一日も早く復帰を願いつつ待つこと実に三十余年。遂にその夢は消え、また、追い討ちをかけるように「幕末の兵火」〔禁門の変・蛤御門の戦・どんどん焼　元治元年（一八六四年）罹災区域　寺町～堀川・七条～今出川〕で、アッという間に焼け落ち、姿を消しました。

それは「天明の大火」より、またまた八十年になります。

何百年も幾多の苦難を乗り越え、珍しいカラクリで皆を楽しませてきた「鷹山」の刀折れ矢尽きた壮絶な最後です。

「栄枯盛衰　世の常」とはいえ、誠に無念残念至極。

明治になって衣裳も整えられ、助かった六本の手もつけられ、鷹匠・犬飼・従者の姿に復元、鷹・犬・粽も上手に再製されましたが雉子は本体はなく、長い尾羽数本が鷹匠の背中に着いています。懸装品は何一つなく、再建を願い寄贈された「皆川月華」の「〝鷹之図〟見送り」と、三体の人形が宵山に淋しく立つ姿を見て、ただ感無量です。

なお、助かった頭・手・鉦など十三点は「市有形民俗文化財」に指定されています。

かつて先人が貧しい中、悪条件をものともせず敢然と復興を果たしたのは、篤い信仰心とお祭を愛する町衆の心意気の賜です。

鷹山が姿を消して、はや百数十年を越えました。

かつて先人は八十年ごとの災害を乗り越えてきました。私達は再建に苦労された先人に笑われないようありたいものです。

十、鷹山の縁起

「増補　祇園御霊会細記　参」（文化申戌秋七月　一八一二年）に記載。

〃●鷹山縁起　【三条通室町西江入町衣棚町北側】

鷹狩の体を風流に作りなしたるせ、鷹つかひ犬つかひの人形あり、又一人の従者樽を負い手に粽を持て食ふ有さまおかしげなり故、太良山とも樽負山ともいふ、是本文の説なり、

増補

一説に、此山の人形右大将頼朝なりといひ、又中納言行平なりといふ、いつれか是なるやと愚町内の人に尋ねしに、其の人の曰、中納言行平なり、即人形箱の書付に行平とあり、然らハ中納言行平に相違あるまじと答ふ、愚按するに或説に云、光孝天皇の仁和二年十二月十四日芹川の行幸の時行平供奉す、衰老の身にて大鷹の鷹飼に宣下せらる、于時述懐の心をよめる、翁さび人な咎そ狩衣けふ斗とぞ田鶴も鳴なり　と詠し摺狩衣の袂に書付と出にける、主上ご覧し逆鱗有て、官爵を解て摂州須磨の浦に被近流云、然ハ行平行供奉の時、鷹飼の体を写したるならん。

因に云、伊勢物語に八業平朝臣供奉して大鷹の鷹飼に宣下せられたる時よめるか如くあれとも、左にあらず、芹川行幸十二月十四日に有し事八三代実録に見ゆ、此時行平卿供奉にて翁さび云とよまれたる事、後撰集に入てうたかひなし、元来伊勢物語八実事を書し物にあらず、作り物語のことなれ八咎むべき事にあらず〃と、記されています。

十一、鋤附

〔人形〕

●中納言行平卿（鷹匠）

○姿　山の左りのはしに有り、犬つかひとむかひ合す、折烏帽子を着し、左に鷹を居、右の手を餌飼を持、衣裳八紺地の朝鮮錦狩衣八紺地紗金あさき八藤のさて貫を着す

○首　素材桧彫刻胡粉彩色（白）目眉口艶出

○胴　板枠胴心柱一本立足なし

○寸法　首正面縦二二糎　横幅一二糎　全長丈一七二糎　腕丈四三糎　手丈四十糎

●犬飼（犬使）

○姿　山の右にあり、年頃三十年の男体、烏帽子着す、右の手に犬の縄を持、衣裳八鳶色朝鮮錦水干萠黄地紗金下ばかま

○首　素材桧彫刻胡粉彩色（白）描目眉口（口開き）艶出

○胴　板枠組胴心柱一本立足なし

○寸法　首正面縦一八糎　横幅全長丈一六四糎

●樽負（従者）

○姿　年来四十才ばかりの男体、烏帽子を着、左右の手にて大粽を持つなり衣裳八鳶色朝鮮錦上に水干萠黄地紗金、下ばかまを着す

○首　素材桧彫刻胡粉彩色（白）描目眉口（口開き）描髪艶有

○胴　腕肩不接合組合足なし

○寸法　首正面八・五糎　横幅一三糎　全長丈一六四糎

●犬　小犬木彫胡粉彩色（白黒）

○寸法　全長三八糎　高二二糎　頭縦一六糎　加足二九糎

●鷹　木彫胡粉彩色翼開く

●屋根　黒塗金かなもの有

●真松　白幣を付る枝に雉一羽有あミかくしあり

●天井幕　赤地錦

●上水引　猩々緋雲に鳳凰のぬい

●下水引　地をり金地雲に麒麟のもやう

●二番水引　紺地錦もやう唐松龍浪等なり

●三番水引　金地きくのもやう

●胴幕　四方とも氈縁八猩々緋紺糸にて異国人のぬい

●見送　花鳥唐縫、へリ猩々緋

●金幣　四本

（寸法　糎に換算）

十二、鷹山の寄り町

◆鷹山の管理責任町の移動

衣棚町・釜座町→衣棚町→衣棚北町

◆「鷹山」の寄り町

衣棚南町（三条通室町西入ル南側）・釜座町（三条通新町西入ル）地ノ口米三石、妙満寺前町（寺町二条下ル）三斗、上本能寺前町（寺町押小路下ル）二斗、下本能寺前町（寺町御池下ル）二斗五升、天性寺前町（寺町姉小路下ル）二斗五升、山本町（御幸町二条下ル）二斗、亀屋町（御幸町押小路下ル）三斗五升、大文字町（御幸町御池下ル）二斗五升、丸屋町（御幸町姉小路下ル）二斗五升

合計　十ヶ町　五石五升

◆寛保二年壬戌（一七四二年）の条に、

〝六月九日山残予幼年の頃八十一日せ、夫より十日にせ、今へ九日より建る、同十一日人形衣裳付け十二日山引きそめ十三日山渡りしまい東洞院四条上ル町にて囃方町中供皆と休足す、夫より当町江帰り、三条西洞院辻迄引行せ、三条西洞院東江入釜座町寄町ある故より〟

と、記されています。

これによって「山建」の次第や「寄り町」とのかかわりがよく判ります。

十三、あとがき

山鉾は、応仁の乱以前、六十四基が巡行に参加していました。その名称と位置は判っていますが、肝心の形態は不明です。当時は氏子の区域外からも参加していました。乱後復興初巡行には、前祭に二十五基が、後祭に十基が雄々しく顔を揃えました。その後、若干の増減がありますが、現在三十二基が元気に活躍、三基が「休み山」です。それは、「大船鉾」(注)(別名　凱旋船鉾・後祭)と「布袋山」(舁き山・前祭)、それに「鷹山」(曳き山・後祭)です。特に〝どんどん焼〟で、鷹山同様罹災した「大船鉾」は、若干の懸装品や道具類も残り、町の皆様の長年に亘る熱意と努力がようやく実を結び、近々百数十年振りにその雄姿をあらわすことでしょう。

衣棚町には、膨大な江戸時代の町記録「衣棚町文書」が残っています。それにより鷹山の全貌を知ることができ、是非、復活したいものです。それには莫大な資金は勿論、それ以上に「維持継承」という重要な問題があります。

(注)　執筆当時大船鉾は休み鉾でした。

町内によほどの経済的有力者が住んでいるか、また、町外に熱烈な篤志家が居ればまた話は別ですが、鉾の車一つが五百万円するといわれる今日、その上すばらしい懸装品や道具類の数々を考える時、もはや一町内の梃子に合う問題ではありません。

また、鷹山をお世話する町が、よく考えられた「寄り町」制度がありながら、過去に於いて何故三転したのか、二度とその跌を踏まないよう、知ることも大切な事でしょう。

●

●

町衆は、当初畏怖の念を以って神様と接していましたが、次第に、いつも身近で見守ってくださる大切な氏神様として、篤い崇敬の念を以ってお祀りしました。そして常に奉仕の心を失うことなく代々お祭を受け継いできました。しかし、社会・経済・環境の変化に伴い、行事に対し「伝統と創意」・「信仰と観光」・「安全性と惰性」、その上「住民の変動と格差」等々、課題が浮上し、お祭に対する意識も多様化してきました。

「祇園祭ハ天下ノオ祭」「千年ヲ超エテ託サレタ祈リ」「都人ノ誇リト責務ヲ負ウオ祭」「スバラシイ美ノ共演　動ク美術館」、そして、「守りたい　残したい　伝えたい　祇園祭」。

かつて、その一翼を担い皆を喜ばせた、「鷹山の再起」です。広く強力な「奉賛支援」の組織を作ってはどうでしょう。

また、連合会には、その町の自主性を尊重しつつ、更なる積極的な「助言と指導」を期待したいものです。

巡行中の鷹山の図

舁き山から鉾形の曳き山に移る過程の鷹山

◆災害と鷹山の形態の変化

鷹つかひ山（三条室町西洞院間）　人形3体・鷹・犬・雉子・真松山籠（舁き山？）

1300 ● 延元元年（1336）　足利尊氏　光明天皇ヲ擁シ北朝始マル

永仁二年（1376）　将軍足利義満　山鉾ノ巡行ヲ見物
高大鉾が倒レ老尼ガ下敷トナリ圧死

元中九年（1392）　南北朝合一

1400 ●

応仁元年（1467）　罹災・再建
～文明九年（1477）

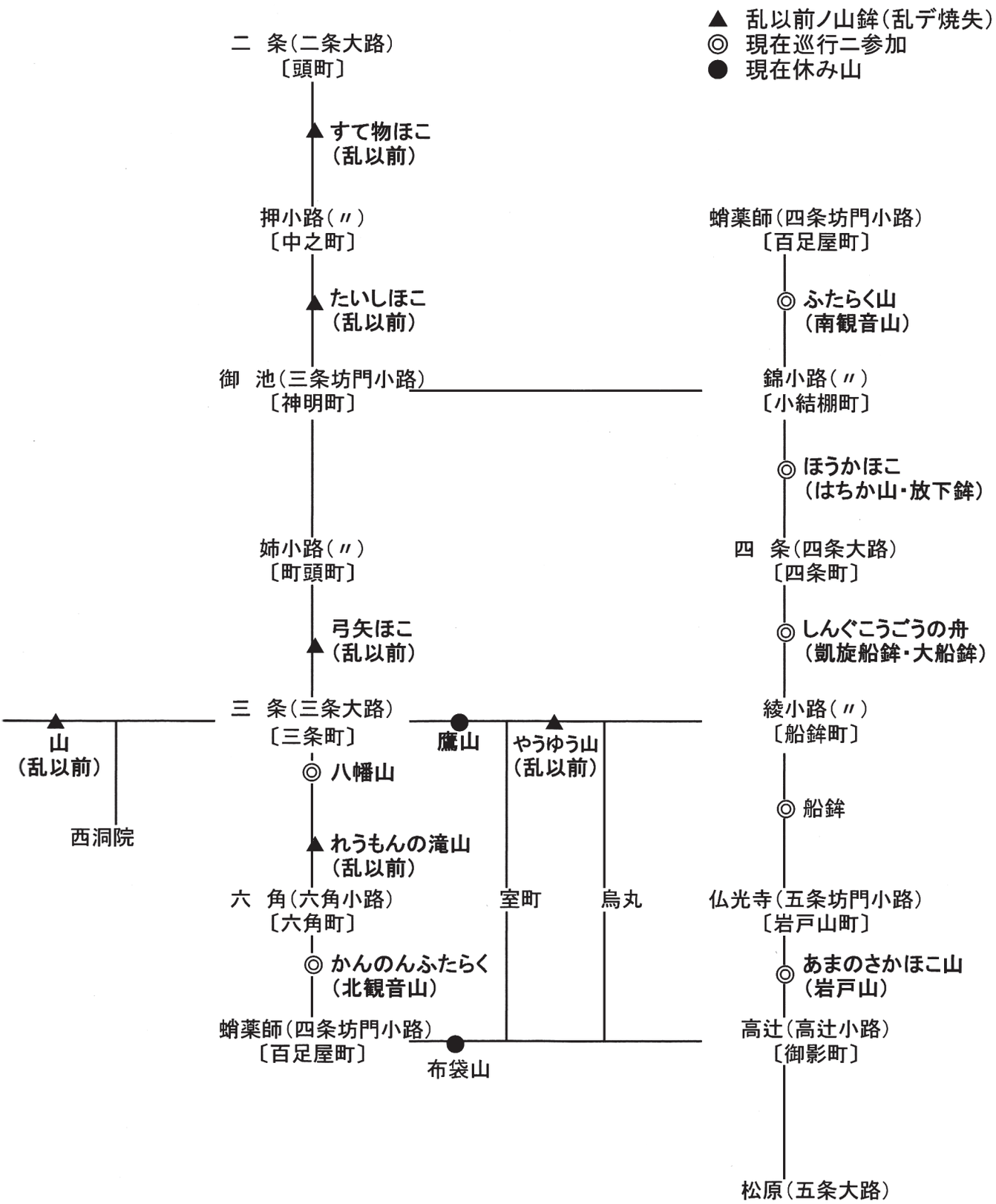
1500 ● 明応九年（1500）　乱後復興初巡行（前祭25　後祭10　計35）
鷹山ハ後祭ノ殿（しんがり）ヲ飾ル
人形3体・鷹犬雉子・真松山籠・囃子方　曳き山？
「洛中洛外図屏風」
鷹山ナシ　町田本　大永年間（1521～27年）ノ京・景観
上杉本　天文年間（1532～54年）ノ後半ノ京・景観
永禄年間（1558～69年）ノ前半ノ京・景観

1600 ● 慶長五年（1600）　関ヶ原の戦

寛永年間（1624～43年）中頃　「祇園祭礼図屏風」（京博蔵）
鷹山之図初見　人形3体・鷹犬雉子・真松山籠・囃子方
曳き山　図①①´

正保二年（1646）　「祇園祭礼図絵巻」図②
1700 ● 元禄十三年（1700）
宝永五年（1708）　罹災・再建
寛保二年（1742）　「衣棚町文書」ニ〝**鷹山**上水引人形水干狩衣新調〟トアル
宝暦七年（1757）　「祇園御霊会細記」ニ**鷹山**之図　屋根が存在
人形3体・鷹犬雉子・真松山籠・囃子方　破風屋根　曳き山　図③
天明八年（1788）　罹災・再建
寛政元年（1789）　急遽舁くき山でニ復活
寛永十年（1798）　曳き山ニ復活
1800 ● 文化九年（1812）　「祇園御霊会細記　参」ニ〝**鷹山**屋根黒塗
金かなもの有、上水引猩々緋、雲に鳳凰のぬい〟トアリマス
文化十四年（1817）　鷹山の雛形（三島為吉氏蔵）　鉾形　曳き山　図⑤

文政十年（1827）　前年巡行中　雨ノタメ懸装品汚損、巡行ニ不参加

元治元年（1864）　焼亡消滅　居祭＝休み山
人形ノ頭・■・樽・鉦　残存ス

◆本通り（町尻小路ー町小路・町ー新町）山鉾配置図